

# インドダージリン茶に見る

## 自然との共生

須賀 努

筆者はここ十年ほど、「茶」をキーワードにして旅をする通称「茶旅」を行っている。茶という飲料は意外に奥が深く、これをキーワードとすれば、その国の経済、社会、文化、歴史、風俗習慣など、普通の旅とは異なる、そして違った角度から多くの事象を見ることが出来る。これからこの「茶旅」をベースに、茶とアジアについて書いて行きたいと思う。

### 紅茶の歴史

皆さんは世界の三大紅茶というのをご存知であろうか。インドのダージリン、スリランカのウバ、そして中国のキーマン（祁門）。中国で紅茶、というのを意外に思う方もいるかもしれないが、元々紅茶も中国から生まれたものであり、福建省のズモークリーな紅茶、正山小種<sup>ラフサンスーチョウ</sup>などは、イギリス人の憧れであったという。一八七〇年代、イギリス、アメリカなどの紅茶人気を反映して、中国安徽省でこの正山小種をヒントに

開発され、その後世界的な品評会で高い評価を受けたのが、祁門紅茶であった。

お茶の歴史、特に紅茶の歴史は帝国主義と深い関わりがある。イギリスでははじめ中国から緑茶を輸入していたが、十七世紀頃から紅茶が飲まれ始め、コーヒー、ココアが脱落して、消去法で紅茶文化が発達したという（角山栄著『茶の世界史』より）。産業革命の進展により、庶民階級でも紅茶が飲まれるようになり、中国から輸入が急増。その支払いに困ったイギリスがアヘン争いというのはご承知の通り。一方ちょうどその頃、イギリスの植民地化が進行していたインドで紅茶栽培が始まったという歴史を知る人は少ない。

インドの紅茶栽培の歴史は一八三〇年頃、アッサム地方で茶樹が発見され、本格的な商業生産に入ったのは一八五〇年代。アッサムで発見された茶樹の葉は大葉種と呼ば

れるのに対して、ダージリンは小葉種と呼ばれる中国原産の茶葉を使用しており、茶樹が中国から持ち込まれ、高級な紅茶生産を目指したことが伺える。イギリス人の中国産へのこだわりが見て取れる。インドでの紅茶生産開始が与えたインパクトは大きなものがあり、イギリスと中国の関係はますますイギリス優位となっていく。

因みに日本も外貨獲得のために明治政府が紅茶の栽培にチャレンジし、植民地とした台湾でも紅茶栽培を行ったがうまくは行かなかった。

### マカイバリ茶園

今回ダージリン郊外の茶園を訪問。その歴史及び現状をつぶさに見て来た。訪問したマカイバリ茶園は、イギリス軍の大佐だった脱走兵サムラー氏が一八四〇年代に創業、一八五七年に初代バナジー氏が経営権を引き継ぎ、翌々年にマカイバリとして登録されたダージリン最古の茶園の一つである。

初代バナジー氏はカルカッタの裕福な家庭に生まれたが、十四歳で家を出て、自らの才覚で富を築き、マカイバリ茶園の経営でもその手腕を発揮、おりからの紅茶ブームもあり、一八九八年に亡くなった際には巨万の富を残したと伝えられる。当時インドはイギリスの植民地、どうしてこの茶園はイギリスの接収を免れたのであろうか。それはマカイバリ紅茶の総代理店として、香港に拠点のあるイギリス系商社を裏に立て、上手くバランスを取り、茶園そのものはバナジー家の所有を保持したからだという。またダーズリンという土地が寒暖の差が激しく、また深い森に守られており、紅茶栽培に極めて適していたことから、良質の商品を生み出したことも強みの一つであっただろう。

しかし二十世紀に入り、紅茶栽培に大量の化学肥料が使用されるなど、ダーズリンにも大量生産の時代が訪れ、土壌破壊が襲ってきた。その状況からいち早く脱却し、今日言うエコを確立したのが、四代目であり現茶園主であるラジャ・バナジー氏。一九七〇年、彼は父親である三代目の反対を説き伏せ、バイオダイナミック農法を他の茶園に先駆けて導入、痩せ衰えたダーズリンの土地を復活させ、有機栽培の先駆者となる。その考え方は「自然との共生」であり、「人々との共生」である。

「自然との共生」、ラジャ氏と茶園を散

歩すると茶樹に蜘蛛の巣が張っている、茶樹の脇に十数種類の草花が生えているなど、本当に自然を大切に、土壌を育み、茶を育てている様子が十分に伺われる。「人々との共生」、十数種類の草花を指してラジャ氏は「草花は狭い場所でも共生できるが人間はそうはいかない。悲しいがそれが現実だ」と嘆く。ただこのマカイバリの村は茶園や工場で働く人々を家族のように扱い、土壌と共に人も育てている。他の茶園主と異なり、ラジャ氏自らが茶園に住み、毎日茶園や工場を見て歩き、行きかう人々には必ず声を掛け、その意見を吸い上げている。

子供達にも積極的に接し、ごみを拾う、茶樹を大切にするなど、様々なことを教えている。それは将来この子達がマカイバリの茶園を守っていく担い手であるという強い認識から生まれてくるもの。茶摘みの間、その子を預かる保育施設からは、笑い声が溢れ、明るい未来が浮かび上がってきた。

一葉一葉、丁寧に手で摘み取られた茶葉はリーフスタイルで飲まれ、後味はほのかに甘い。インドのチャイやイギリスのミルクティーとは根本的に違う、中国を感じさせる何かがある。そう言えば、ダーズリン地方はインドでありながら、インド系住民より、チベット系のレプチャーと呼ばれる民族が多数を占め、顔だちはわれわれ日本人とそう変わらない。

現在マカイバリのお茶は紅茶のみならず、

緑茶、白茶なども作られ、この環境対応を評価したアメリカ、ヨーロッパから多くの注文が届き、日本での愛飲家も増えているようだ。

#### 中国では既に作れない中国原産茶葉

筆者が茶園を訪ねたのは、ちょうど国慶節休み明け。多くの中国人、とくに茶業関係者が当地を訪れ、工場や茶園を見学していた。この大自然の中、深い森林の中にある茶園を見て、「今から中国でこのような茶園を作ることは出来ない」と早々に白旗を上げ、マカイバリ茶の買い付けを申し出る業者もいるという。確かに中国での自然破壊は茶園にも及んでおり、大量生産、利益追求に姿勢が鮮明である。

今の中国人には紅茶をゆっくり味わう余裕はないらしく、折角この素晴らしい茶園に来てもまるで観光地のように工場の写真を撮りまくり、ろくに説明も聞かずに立ち去る人もいる。またこの茶葉をティパックに入れて売りたい、といった提案もあつたと聞く。いいお茶は余裕がないとできないのでは、と思わざるを得ない。

中国も烏龍茶からプーアル茶と来て、今は紅茶ブーム。しかし考えてみれば中国原産の茶樹を使ったダーズリンのお茶に本家が全く太刀打ちできない、これは何を指しているのだろうか。一度破壊してしまつた自然を取り戻すことは左程に難しいということであろうか。

(コラムニスト)